



情報処理学会誌の 目指すところ

和田 英一 / IJ 技術研究所
wada@u-tokyo.ac.jp

老残の身をも顧ず、石田前編集長より引き継いで、本号から編集を担当することとなった。会員・読者諸賢の支援と期待をお願いしたい。

石田編集長のころから情報処理学会誌の bit 化が囁かれていたが、本家の bit は 1 年前に休刊になった。それにつられて学会誌が休刊したりせぬよう、心して頑張りたいと思う。とにかく以前にもまして「面白くてためになり、やさしくて分かりやすい」情報処理学会誌を目指すつもりである。

学会誌とはなにか。1960 年、情報処理学会設立の当初、学会誌は、論説、会告、ニュース、論文紹介、プログラムのページなどで構成されている学会唯一の刊行物であった。岩波の「科学」に似せたデザインで作られたと聞く。昨今では電子図書館で読める 1 巻 1 号 (1960 年 7 月) は高橋秀俊先生の「電子計算機の将来」という論説で始まった。とにかく電子計算機に関する論文を載せてくれる貴重どころであった。

幾歳月かの後、学会誌から論文誌が独立した。伝統ある「ジャーナル」の呼び名も論文誌が持ち去った。さらに加えて研究会論文誌なるものも出現した。会告は別冊になっていたが、この 4 月からインターネットアクセスのみになる。ニュースは最近みあたらない。プログラムのページもいつしか消えてしまった。

また情報処理学会の研究対象であった分野においても、日本ソフトウェア学会、日本ロボット学会、人工知能学会などが相次いで設立され、情報処理学会とその学会誌は、残されしを漁っているかの如き印象さえ受ける。

しかし、多くの情報技術に関与する、拡大一方の分野をカバーしているのが情報処理学会であるから、領域内の各種の新技术の理解はかならずしも容易ではなくなりつつある。他方、情報技術で仕事を進めるには、相互の技術の理解が多かれ少なかれ不可欠である。それを会員諸氏によく理解できるよう説明するのが学会誌に託された使命であるのは明らかである。

さらに周知の如く、進歩は驚くべく速い。なにでも手早く身に付けねばならず、さればといって生涯教育に参加している時間もないというのが、大方の会員諸兄弟の実情であろうと心得る。そうだとすれば、会費を払っているだけで配布される学会誌を、それらの貴重な情報源とするのはきわめて意義あることといわざるを得ぬ。ぜひ左様に利用していただけるよう、内容を維持したいと考えている。

30 年前、私が学会の理事を仰せつかった時も学会誌の担当であった。その頃日立におられた高田昇平氏より、学会誌は老人にとってはむずかし過ぎるとのご注意があって、恐縮した記憶が残る。高田氏は 1911 年のお生まれなので、今の私は当時の高田氏より 10 歳も多く馬齢を重ね、ますます愚老の域に入り、いやが上にも老人力を蓄積している。その私自身にも理解できるよう、「やさしく」を買きたい。ただ「プログラム・プロムナード」の如き、頭の鍛練が目的の記事にあっては、無碍にやさしくできぬことも了承されたい。

最近 IT 関係の文献を読んでいて、読む気を殺がれるのは、おびたしい略号である。HTTP とか URL とかはまだしも、IP や ATM になると文脈依存になるからややこしい。しかしこの辺はまだ分かる。ところが DHCP, MPLS などなど、これがなにかとか、なにの略号とかは、(私は承知しているが) 怪しくなり始める。「分かりやすい」ためには、これらの略号を分からぬまま放置するわけにもいかぬ。略号の説明をできるだけ省略せぬよう心がけたい。

学会誌とはなにか。昨年、誰かが学会誌に書いていたような、「bit の代わりにくだらない文章を書く」ところでは決してないのである。

学会誌への提案などはもとより歓迎する。電子メールで editj@ipsj.or.jp へ送られたい。

最後に、今年度から編集委員に加わってもらったのは、

菊田泰代 (富士通)

前田敦司 (筑波大学)

増井俊之 (ソニー CSL)

山崎憲一 (NTT ドコモ)

の諸君である。

(平成 14 年 3 月 1 日)

